

アニメと「グローバル化」：『ソニックX』の世界観

谷口, 秀子
九州大学大学院言語文化研究院文化情報学部門・メディア文化情報学

<https://doi.org/10.15017/6796446>

出版情報：言語科学. 40, pp. 35-45, 2005-03-15. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会
バージョン：
権利関係：



アニメと「グローバル化」

——『ソニックX』の世界観——

谷 口 秀 子

1. はじめに

日本のアニメ『ソニック X』は、いろいろな要素を持った作品である。まず目を引くのが、アメリカから輸入された作品かと思うほどの、日本的な要素の欠如である。主な舞台は、アメリカを思わせる西洋的で近代的な都市であり、街の看板などがすべて英語で書かれており、登場する人物も社会もきわめてアメリカ的である。

『ソニック X』の場面設定がかなり忠実に現代のアメリカ的な社会をなぞっているのに対して、主人公であるソニックは、きわめて虚構性の高い存在である。ソニックは、次元と空間の異なる世界からやってきた超音速で走る青いハリネズミであり、人間と同様の知性と感情を持ち、人間と同じ言葉を操る。面白いことに、このような異なる次元と空間からやって来たソニックにも、肩をすくめる身振りなどに西洋的なイメージが散見される。また、ソニックは、アニメのところどころで、“No way.”や“What’s up?”といった短い英語の表現を使うが、このことも、日本の視聴者に、西洋的な、あるいは、アメリカ的なイメージを感じさせる効果を持っている。

昨今の日本において、「グローバル化」という言葉は、西洋化またはアメリカ化と似たニュアンスで用いられることが少なくない。その意味で、『ソニック X』は、かなり「グローバル化」された作品であると言えよう。小論では、「グローバル化」という観点から、『ソニック X』に描かれる社会的な側面を論じる。

2. アニメ『ソニックX』の背景

アニメ『ソニック X』は、2003 年 4 月から 2004 年 3 月までの間、テレビ東京系列

のテレビ局で、全 52 話（各 25 分）が放映され、その後、ビデオ化および DVD 化された。また、『ソニック X』は、日本の他、アメリカ、ヨーロッパ、アジアでも、テレビ放映され、人気を博した。²⁾『ソニック X』は、もともと世界展開を視野に制作されたようであるが、³⁾ 世界に進出している日本の人気テレビアニメが、必ずしも、「グローバル化」されているわけではないことは、『ドラえもん』の例を見ても明らかであろう。

『ソニック X』が日本的な要素を欠いており、きわめて「グローバル化」されているのは、このアニメが、世界的な成功をおさめたコンピュータ・ゲームをもとにして作られていることと無縁ではないであろう。アニメ『ソニック X』は、セガ社のゲームソフト『ソニック・ザ・ヘッジホッグ(Sonic the Hedgehog)』（1991 年）をはじめとして、その後シリーズ化された一連のソニック・ゲームのキャラクターとコンセプトをもとに制作された作品である。ソニック・ゲームは、全世界的に販売されて、多くのファンを獲得し、アメリカにおける人気は、日本での人気を凌ぐほどであったという。また、海外でのソニックの人気ぶりは、ソニックを日本でアニメ化した『ソニック X』に先立ち、日本のみならず、アメリカやイギリスでも、ソニック・ゲームをもとにして、ソニックを主人公にした独自のコミックが制作されたことから明らかである。

全世界的に販売を展開するために、『ソニック・ザ・ヘッジホッグ』をはじめとするソニック・ゲームに登場するキャラクターには、ソニック (Sonic the Hedgehog)、テイルス (Miles "Tails" Prower)、エミー (Amy Rose)、ナックルズ (Knuckles the Echidna)、ドクター・エッグマン (Doctor Eggman) というような、英語の名前が付けられているが、アニメ『ソニック X』でも、これらの英語の名前はそのまま用いられている。また、アニメでは、新たに人間の登場人物が多数加えられているが、その名前のほとんどが、西洋的な名前である。

その結果、たとえば、ハリモグラのナックルズは、強い「こぶし」(knuckles) を武器にしていることから、このように名付けられたと思われるが、ナックルズという名前と「こぶし」の関係は、ほとんどの日本の子どもたちにとって、認識が不可能であろう。もっとも、外国の映画やアニメなどが日本で放映される場合には、外国語の名前をそのまま使うことが多いため、日本の視聴者には意味のわからない外国語の名前に対しての抵抗感はあまりなく、かえって、意味のわからない英語風の名前が、西洋的なイメージをさらにかき立てることにつながるとも言えよう。

3. 『ソニックX』におけるアメリカ的な社会

『ソニック X』の設定は、きわめて SF 的である。世界征服をもくろむドクター・エッグマンと激しく闘っていたソニックとその仲間たちは、巨大な「カオスコントロール」のエネルギーによって、ドクター・エッグマンらとともに、時間と空間の歪みに吸い込まれてしまい、彼らのいた世界から時空を超えて、「人間世界」⁴⁾すなわち「地球のように“人間”のいる所」⁵⁾へと飛ばされてしまう。

「地球のように“人間”のいる所」の中で、『ソニック X』が主な舞台にしているのは、ソニックが住む架空の都市であり、この都市には、現代のアメリカを彷彿とさせる部分が多く見られる。たとえば、西洋的、それもヨーロッパ的と言うよりはアメリカ的で近代化された街並み、登場人物の西洋的な名前と風貌、英語で書かれた看板や学校の掲示物、ホワイトハウスにそっくりの建物や大統領の存在、アメリカ的な格好の警官やパトカーなど、枚挙にいとまがない。また、中心的な登場人物であるクリスは白人の少年であるが、それ以外の登場人物には、白人の他に、黒人やヒスパニック、東洋人などの多様な人種が見られ、アメリカの多民族性を映し出しているかのようである。このように、『ソニック X』に描かれているのは、現在のアメリカ社会にきわめて近い社会であり、それゆえ、『ソニック X』は、日本における西洋を舞台にしたアニメが、洋館や金髪の男女に代表されるような、主に白人を中心としたロマンティックなフィクションに近い社会を描くことが多かったのとは一線を画しているのである。

これまでの日本のアニメにおいて、西洋を描く際には、多くの場合、ほとんど白人しか登場しない西洋社会が舞台になることが少なくなかったが、一方、『ソニック X』は、現代のアメリカ社会を彷彿とさせるような多様な民族からなる多文化社会をなぞろうとしている。『ソニック X』においては、街を歩く人々の人種は多様であり、小学校の場面でも、多様な人種の子どもや車いすに乗った少女が、きわめて自然な形で描かれている。このように、『ソニック X』は、社会の多民族性や多文化主義を意識した作品であると考えられる。

アメリカ的な社会を描く際に、『ソニック X』は、誇張やデフォルメを加えながら、社会のいろいろな側面を切り取っている。まず目につくのが、ハリウッド的なスケールの大きさである。ソニックが生活を共にすることになる少年クリスの父は、コンピュータ・ソフト会社の社長で大富豪であり、母は人気女優である。一家は広大な敷地に建つ大邸宅に住んでいるが、クリスの両親は、ともに仕事で多忙をきわめているため、長い期間にわたって家を留守にしており、ひとり息子のクリスの世話を使用人と祖父に任せているところにも、その良し悪しは別にして、従来の伝統的な家族のあり

方とは異なる現代社会における新しい家族の形態が提示されている。

さらに、『ソニックX』に登場する女性の描き方も、日本の少年もののアニメや漫画に多くあるような、男性主人公の恋愛の対象や主人公に助けられるか弱い女性像一辺倒ではない。たとえば、クリスが二の足を踏むような場面にもひるむことのないクラスメートのフランシスや、巨大なハンマーを振りかざして、ソニックを助け出しに行くエミーや、危険を覚悟でドクター・エッグマンの基地に潜入するふたりの女性（軍人トパーズと宝石泥棒ルージュ）の連帯感など、多種多様な女性像が提示されているのである。

また、白人であるクリスのクラスメートには、白人だけではなくいろいろな人種が描かれ、クリスの親友のひとり、黒人の少年ダニーである。また、車いすに乗った少女ヘレンも、クリスのクラスメートのひとりとしてごく自然に描かれ、か弱く守られるばかりの存在としてではなく、等身大の普通の少女として描かれている。また、現代社会の諸相に対する風刺も随所に見られ、たとえば、テレビ中継や記者の取材などの場面では、メディアの裏側をコミカルに描き、大統領とその側近を描く場面では、政治の裏側をコミカルに風刺している。

4. 人種の多様性とステレオタイプ

前に述べたように、アニメ『ソニックX』は、『ソニック・ザ・ヘッジホッグ』をはじめとする一連のソニック・ゲームのキャラクターをもとに制作されているが、ソニックと同じ世界からやって来た悪役のドクター・エッグマン以外の人間は、『ソニックX』に固有のものである。『ソニックX』は、ソニック・ゲームに登場する青い超音速ハリネズミのソニックとその仲間であるキツネのテイルスやウサギのクリーム、ハリネズミのエミー、ハリモグラのナックルズなどのキャラクターと、唯一の人間である悪役のドクター・エッグマンとその手下のロボットたちに、アニメ用に創造されたクリスをはじめとする人間の登場人物や新たなロボットたちを加えて制作されている。

『ソニックX』の主要な登場人物は、

クリス・ソーンドイク (Chris Thorndyke) :	12歳の少年
チャック・ソーンドイク (Chuck Thorndyke) :	クリスの祖父
ミスター・タナカ (Mr. Tanaka) :	ソーンドイク家の執事
エラ (Ella) :	ソーンドイク家のメイド

であり、ソニックは、人間世界に飛ばされた時に、ソーンダイク邸のプールに落ちたところをクリスに助けられたのをきっかけに、仲間と共に、ソーンダイク家の邸宅で生活することになる。

ソニックのゲームが、カオスエメラルドをめぐるソニックたちとドクター・エッグマンとの闘いなどにおけるスピード感あふれるアクションが中心であるのに対して、アニメ『ソニックX』は、人間の登場人物を多数登場させることにより、人間性のドラマにも仕上げられている。つまり、『ソニックX』は、カオスエメラルドをめぐるドクター・エッグマンとソニックたちの闘いを軸にしながらも、依存心が強く引っ込み思案の少年クリスが、ソニックやその仲間たちとのふれあいや冒険を通して、精神的にたくましく成長する姿を描く物語にもなっているのである。この物語の中で、クリスは、危険を顧みずに仲間を助けるソニックとその仲間たちとの関わりにおいて、自らの意志で行動する主体性と他人を思いやる心を身につけていくのである。

上にあげた主要な登場人物は、多様な人種からなるアメリカの社会を反映して、白人（クリス、チャック）、東洋人（日本人：ミスター・タナカ）、黒人（エラ）⁶⁾ という多様な人種構成になっており、これらの登場人物の人種と社会的地位や職業は、西洋の社会に見られる人種にまつわるステレオタイプを反映している。つまり、大富豪のソーンダイク家の人々は白人、その一家に雇われている執事は眼鏡をかけ黒い髪を七三に分けた東洋人（日本人）、メイドは太った黒人というように、富裕な雇い主は白人であり、その使用人は、有色人種という固定的な人種と職業の関係が見られるのである。

『ソニックX』に見られるような社会的・経済的な位置や職業と人種の固定的な関係は、西洋社会に見られるステレオタイプのひとつである。『ソニックX』が、日本のアニメでありながらも、「グローバル化」されたアニメであることから、この作品において、ソニックと並んで中心的な役割を担うのは、白人のクリス・ソーンダイクであり、さらに、唯一の日本人の登場人物であるミスター・タナカは、富豪のソーンダイク家に仕える立場にある。最近の欧米の映画やドラマなどにおいては、このような人種と職業のステレオタイプを再生産するのをさけるために、わざとこのステレオタイプを逆転させている例が少なからず見られるが、『ソニックX』では、人種に関するステレオタイプがそのまま用いられているのである。

しかしながら、『ソニックX』においては、人種的ステレオタイプはあるものの、それが、西洋で見られるような人種的偏見とは全く結びついていないことは特筆すべきことである。有色人種であるミスター・タナカやエラに対する人種的偏見や蔑視にも

とづく侮蔑的な表現は皆無であるし、ソーンダイク一家にとって、ふたりは責任感が強く有能で信頼に足る人物として描かれている。このように考えると、『ソニック X』は、人種のステレオタイプの背景にある偏見や固定観念を意識することなく、アメリカ的な雰囲気を出すために、アメリカ社会に表れる人種に関するステレオタイプの表層をなぞっているに過ぎないように思われる。

5. 東洋の描き方

5. 1. オリエンタル・シティ

アメリカ的な都市を中心に展開する『ソニック X』においても、一部のエピソードにおいては、「地球のような所」の他の場所も登場する。第 17 話「ナックルズ！怒りの鉄拳」という、ナックルズが赤いカオスエメラルドを手に入れるエピソードでは、中国的なイメージにあふれたオリエンタル・シティが物語の舞台となっている。オリエンタル・シティのエピソードは、ナックルズを中心に展開し、ナックルズの視点を通して、彼がカオスエメラルドを探しに短期間訪れたオリエンタル・シティでの顛末が示される形式になっている。このエピソードにおいては、中国的な旋律のバックグラウンドミュージックが流れ、中国的な街並み、黄（ファン）のような中国的な名前、中国語の看板、「4000 年の歴史」への言及など、中国のイメージが氾濫している。そして、特徴的なのは、ナックルズやソニックが住んでいるアメリカに似た街がきわめて近代的であるのに対して、オリエンタル・シティは、前近代的な古い感じのする街として描かれていることである。

欧米の映画やテレビコマーシャルにおける日本を含む東洋の描き方には、非西洋として西洋の対極にある、近代化に遅れている古くさい存在というイメージが少なからず見られる。たとえば、映画『グレムリン』におけるように、アメリカの現代社会に生活する主人公が摩訶不思議な生き物であるギズモを手に入れるのは、他ならぬチャイナタウンなのであり、西洋における東洋観には、得体の知れない、謎めいたイメージもつきまといっている。この意味で、東洋は、西洋にとって、依然として「オリエンタル」的な存在なのである。

『ソニック X』に描かれているオリエンタル・シティも、等身大の東洋あるいは中国というよりは、西洋人の目から見た東洋のイメージに近い。『ソニック X』は、日本人の手になってはいるものの、アメリカ的な印象を与えるように作られ、「グローバル

化」されているため、非西洋である東洋を描く際にも、西洋の視点というフィルターを通して、東洋を描く試みがなされているのであろう。

5. 2. 「ある島国」日本

『ソニックX』には、他にも、クリスやソニックたちの住むアメリカ的な都市以外の場所が描かれている。第22話「夏休み・チャオ〜な観察日記」では、クリスが学校の友達やソニックやテイルスたちと訪れる「ある島国」が舞台となっている。この島国は、ミスター・タナカが生まれ育った国であり、風景などから、日本がモデルになっていることが明らかである。このエピソードでは、日本らしき島国の山の奥にあるミスター・タナカの故郷でサマーキャンプをするクリスたち一行が遭遇する出来事を扱う中心的なエピソードに、時折、この珍しい島国の名所を観光するソニックの短い場面が挿入されている。ソニックが名所を巡る場面では、富士山や新幹線が描かれ、京都の古い街並みや舞子の他、東京の下町や名古屋城の金の鯱なども登場し、外国人の異国情緒をかき立てるステレオタイプ的な日本のイメージが強調される。また、ミスター・タナカの故郷である山里は、空気がおいしく空がきれいで、清らかな水が流れ、多くの虫や魚が生息する自然に恵まれた場所である。その自然環境のすばらしさは、きれいな清流のあるところでしか生息できないチャオという架空の生物が、ここでは野生のまま多数生息していることによって、より強調されている。

このような日本の描き方にも、オリエンタル・シティの描き方同様、『ソニックX』独特の視点が見られる。外国人が日本のイメージとして抱いている、富士山、新幹線、舞子などを描き、美しい日本の山里を描くことにより、現実にある現代の日本と言うよりも、外国人、それも西洋人の目から見た日本の姿を表現しているのである。この日本の姿は、現代の日本のごく一部を描き出しているに過ぎず、日本にもあるビル街の雑踏や煙をあげる工場や破壊された自然などは、一切登場しない。ここに登場するのは、いわゆるノスタルジックと言えるほどの、古き良き日本の姿であり、クリスが住む街が現代のアメリカ社会を描いているのとは実に対照的である。ここにも、ある意味で、西洋の視点というフィルターを通した、日本についてのステレオタイプのうち、伝統と自然の国という、ロマンティックに理想化された日本の姿が描かれている。もっとも、『ソニックX』は、「グローバルな」視点を保つために、意図的にこのような描き方をしているのであって、西洋的な日本観に追随しようとしているのではないのである。

『ソニックX』においては、日本の外の視点から見た日本の姿が表れているが、この描き方の中にも、日本人の手になっていることを感じさせる部分もある。一般に、外国の映画やドラマやコマーシャルに見られる日本および日本人の描き方には、日本的な要素と中国的な要素が混在しているものや、昔の日本と現代の日本の混同や混在が見られることが少なくない。それに比べて、『ソニックX』における日本の姿は、現代の日本と言うよりは、古き良き日本を強調した作りになっているとは言え、外国における誤った日本の姿とは全く異なる日本人から見ても自然な日本の姿である。この意味で、『ソニックX』は、西洋のフィルターを通して日本を描いている形をとっているものの、西洋の誤解や偏見を含んだ不自然な見方をそのまま用いるのではなく、等身大の日本に近い姿を描こうとしているのである。

6. ミスター・タナカ

日本人と見られるミスター・タナカの描写も、西洋というフィルターを通して見た日本人男性のステレオタイプに他ならない。ミスター・タナカは、ソーンダイク家の執事であり、細い切れ長の目、七三に分けた黒髪、黒縁の眼鏡、滑稽なほどの生真面目さ、表情や感情表現の乏しさなど、西洋でよく見られる日本人のステレオタイプを体現している。また、このような外見の他に、サムライ映画の大ファンであり、武士道を重んじ、空手の心得をもっているミスター・タナカは、現代の日本人が自ら抱く日本人像とはほど遠い。このように、ミスター・タナカは、西洋人の目から見た典型的な日本人のステレオタイプを具現化した、西洋人の持つ固定観念としての日本人像なのである。

ミスター・タナカは、外見上は、ステレオタイプの日本人像を体現してはいるものの、彼の人物像には、西洋社会における日本人に対するステレオタイプにつきまとう誤解や偏見にもとづく否定的な側面は全く感じられない。たとえば、出っ歯で姿勢が悪く、いつも頭をぺこぺこ下げて、「はい、はい」と繰り返す日本人像は、欧米のドラマなどで時々目にするものであり、いざという時にずる賢く立ち回ったり逃げ出したりして責任逃れをするステレオタイプの日本人像が見られることも珍しくない。それに対して、ミスター・タナカは、日本人のステレオタイプにふさわしく、髪を七三に分けて眼鏡をかけてはいるが、出っ歯でもなく、姿勢が悪くもなければ、ぺこぺここと不自然なお辞儀をすることも、曖昧なニヤニヤ笑いをすることもない。また、ミスター・タナカは、クリスを守るためには自らの危険をも顧みないような、誠実で職

務に忠実な人物として描かれている。そのため、ミスター・タナカは、西洋人から見た日本人のステレオタイプの容貌をしてはいても、日本人の視聴者に不快感を抱かせることはないのである。

このように、『ソニックX』には、西洋から見た日本人のステレオタイプが一部利用されているが、日本人に対する偏見や嘲りは、全く見られない。このアニメが日本で作られたことを考えれば、当然のことではあるとは言え、『ソニックX』は、ミスター・タナカの外見や滑稽なまでの生真面目さや武士道へのこだわりをコミカルに描いてはいるものの、そこには、西洋における日本人に対する偏見は微塵も感じられないのである。『ソニックX』は、ミスター・タナカを作り上げることによって、西洋人が抱いているステレオタイプの日本人像を逆手にとって風刺し、視聴者の笑いを誘っているが、同時に、ミスター・タナカの人物像には日本人に対する誤解や偏見にもとづくステレオタイプを取り入れないことによって、結果的に、日本人に対する誤ったステレオタイプを再生産しないようになっているのである。

また、オリエンタル・シティの中国人ホークの描き方についても、ミスター・タナカの場合と同様のことが言える。ホークは、ステレオタイプの中国人の外見や表情をしているものの、西洋の映画などにありがちな、ずる賢い悪役やお人好しの愚か者としては描かれていない。ホークは、以前にナックルズに受けた恩を忘れず、ナックルズに対して常に誠意ある態度を示し、危機に陥っても最後までナックルズを裏切ることがないという、善良で誠実な中国人像として描かれているのである。

7. おわりに

日本のアニメが世界中で人気を博し、連日、多くの国々で日本のアニメがテレビ放映され、ビデオやDVDが販売されている。その筆頭は、『ポケットモンスター』と『ドラえもん』であろう。面白いことに、両者とも、海外で放映される際にも、日本のアニメとしてのアイデンティティを残したままである。たとえば、『ドラえもん』では、日本の日常の生活が描かれており、また、『ポケットモンスター』の場合は、たとえば、イギリスで放送された際には、サトシなどの登場人物の名前は、英語の名前に変えられてはいるものの、ポケモン、ピカチュウなどの表現はそのまま用いられている。電気を発するネズミであることをよく表しているピカチュウという名前は、英語では全く意味をなさないが、英語版でもピカチュウのままであり、登場人物のひとりが湯豆腐を食べる実に日本的な場面も、そのまま用いられているのである。

一方、『ソニック X』は、世界的に有名になったゲーム・ソフトをもとに作られたこともあり、日本のアニメとしてのアイデンティティがほとんど感じられないアニメである。『ソニック X』は、世界展開を視野に入れて、「グローバル化」、すなわち、アメリカ化されており、日本における最近の「グローバル化」指向の影響を感じさせる作品なのである。『ソニック X』が、日本のアニメでありながら、このような「日本の不在」を抱えていることについての賛否は分かれるところであろう。しかしながら、このアニメは、西洋を描く場合には、白人中心の、現実にはもはやほとんど見られなくなった、イメージとしての西洋社会を描くことの多かったこれまでの日本のアニメとは異なり、アメリカをはじめとして現在多くの国に見られる多民族からなる社会を映し出している。そのため、『ソニック X』は、結果的に、日本の子どもたちに、多民族・多文化社会の存在を知るきっかけを与えることにもなっているのである。

『ソニック X』においては、人種、民族、性別、障害の有無などに関する偏見や固定観念にあまりとらわれず、多種多様な登場人物が描かれており、すべての人々が人種や宗教や性別などに関わりなく個人として尊重されるべきであるという、マルチカルチュラリズム的な理念の反映が感じられる。もっとも、『ソニック X』には、社会構造における白人と非白人の関係のステレオタイプが持ち込まれている部分があるとは言え、人種による選別や非白人への偏見や蔑視の意図は全く見られず、子どもたちに、多民族・多文化社会という視点を提供し、多民族の共生する姿をかなり理想に近い形で提示していることは、大いに評価されるべきであろう。

註

1. 亀垣一（監督）『ソニック X』（DVD 全 13 巻）（セガ、ユニバーサルミュージック、2003-2004）。なお、テレビアニメ『ソニック X』は、DVD 化にあたって、若干の手直しを加えられている。
2. たとえば、アメリカでは、日本の『ソニック X』に大幅な編集を加えたものがテレビ放映され、子どもたちの絶大な人気を得た。アメリカでの題名は、*Sonic X* であり、DVD 化もされている。また、以下のアメリカのアマゾン HP における *Sonic X* の DVD についてのカスタマー・レビューにあるように、アメリカ版に

おける大幅な削除のため、アメリカ版に不満を感じて、日本版の『ソニック X』の方が優れていると考えるアメリカのファンも少なくない。

The original uncut Japanese episodes are funny and whitty, but when this series was cut and dubbed for U.S. audiences the dialog became really stupid, and they even changed the music! I say wait for a professional uncut subtitled release. (genezix) (<http://www.amazon.com/>)

3. 「ソニックついにテレビアニメ化——『ソニック X』制作発表会開催」『Game Watch』2003 年 3 月 18 日.

<http://www.watch.impress.co.jp/game/docs/20030318/sonic.html>

4. 『ソニック X』 vol.1, 「解説」.

5. 「ソニック X」『Anime X-press』テレビ東京アニメ公式サイト.

http://www.tv-tokyo.co.jp/anime/sonic_x/character.html

なお、『ソニック X』のその後のエピソードで、ソニックたちがこの世界の未来からやって来ていたことがわかる。

6. エラは顔立ちや浅黒い肌の色から、黒人であるように思われるが、ヒスパニックである可能性もある。彼女の眼の色は、場面によっては、青く見えることがあるが、日本のアニメにおいては、慣例として、日本人の目ですらも、青色や緑色などに色づけされることが少なくないことから、彼女の眼が青いからといって白人であるということにはならない。なお、同じ理由で、クリスのクラスメートのダニーは、黒人の少年であるが、彼の目は、緑色に描かれている。